

# 明治時代の恋の句についての研究—「明治新撰俳諧姿見集」を中心に—\*

横松令奈 (学籍番号 201021766)

研究指導教員：綿拔豊昭

## 1. はじめに

### 1.1 研究背景

「明治新撰俳諧姿見集」は明治15年(1882年)に出版された恋の句を収集した類題句集であり、乾之巻、坤之巻からなる。

撰者は橋田春湖、近藤金羅、小野素水、編纂者は加藤東岡、出版者は茂木房五郎である。

坤之巻は嘉永7年(1854年)に刊行された類題句集「俳諧恋のたより」の復刻である。

①『俳文学大辞典』などにも立項されず、②今までその研究はなされていないが、③明治期の恋の句についての貴重な資料である。

### 1.2 研究目的

本研究では明治時代に成立した唯一の恋の句を集めた句集であり、当時需要があった、「明治新撰俳諧姿見集」を分析し、明治時代の旧派俳諧における恋の句について、その特徴や傾向を明らかにすることを目的とする。

### 1.3 研究方法

本書を翻刻しExcel2007でまとめ、それをもとに、本書の構成や句数、俳人を分析する。

人名録の俳人については本文の俳人と照らし合わせて、俳人の特徴を分析、考察する。

恋の句の表現の分析には俳論書に掲載されている恋の詞を集め、先に恋の詞の時代による変化や表現の特徴を分析した後、本文と照らし合わせ、どのような詞が使われているのかの傾向や特徴を分析し、そこから旧派の恋の句とはどのようなものかを考察する。

## 2. 「明治新撰俳諧姿見集」の構成

### 2.1 序文と跋文

序文は春湖、素水、金羅による。それによれば、本書が恋の句を集めた類題句集であること、本書より先に同じ様な句集がありそれを参考としたことが記されており、これが「俳諧恋のたより」である。序文の後には目次がある。

跋文は東岡による。それによれば、茂木房五郎の依頼によって東岡が恋の句を収集したこと。

### 2.2 本文

乾之巻には2026句の発句が季節・季題によって分類され収められている。

坤之巻は「俳諧恋のたより」の復刻であり、457の前句と545の付句が収められている。

坤之巻巻末には人名録が付されている。

## 3. 「明治新撰俳諧姿見集」の俳人

### 3.1 人名録

人名録には538名の俳人の名前と住所の掲載されている。人名録と本文の俳人を比べると、人名録のうち501名は乾之巻に掲載されている俳人と合致した。

乾之巻に掲載されている句数が多い俳人の上位は蕉風俳諧の俳人が多く、乾之巻では蕉風俳諧から明治初期まで幅広い時代の俳人の句が掲載されている。

坤之巻については、人名録に名前が見られるのは5名のみで、乾之巻の本文の俳人と比較しても共通していたのは30人であった。

### 3.2 考察

以上から編集方針として、少数の俳人の句に限って収集するのではなく、できるだけ多くの俳人の句を収集しようとしたことが考えられる。

## 4. 「明治新撰俳諧姿見集」の恋の句

### 4.1 恋の詞

恋の句の分析のために参考とした恋の詞の掲載があった俳論書は、「毛吹草」「掌中手桃燈」

「太陽暦四季部類」の3点である。この3点は出版された時代も異なるため、先に恋の詞の時代による差異を明らかにした。

俳論書ごとに重複する詞を除いた419の恋の詞のうち、蕉風俳諧以前の刊行である「毛吹草」

\* "A Study on the Haiku about Love in the Meiji Period: Focused on "Meiji Shinsen Haikai Sugatamishu"" by Reina YOKOMATSU

には、恋の故事、ことわざや状況が細かく分けられた詞が多かったのに比べて、近世後期の刊行である他2点は「恋」「忍」のように音数が短い詞や、恋の定番と言える詞が多かった。

恋とわかりやすい詞や単純な詞であれば一般の人でも恋の句が詠みやすいからであると考えられる。

#### 4.2「明治新撰俳諧姿見集」本文の恋の表現

これらの恋の詞を本文と照らし合わせたところ、209の詞が使われており、特に多くの句に使われていた恋の詞が掲載されていたのは「掌中手桃燈」であった。本文中に特に多く使われていた詞は「恋」「思」「忍」などである。

このようなことから恋の詞から見ると、「明治新撰俳諧姿見集」に掲載されている恋の句は近世後期の恋の詞が基準となっており、蕉風俳諧以前の恋の詞はあまり見られない。

しかし、恋の詞が使われていない恋の句も多くあり、これらには非恋詞が使われている句が200句以上見られるなど、恋の句が俳論書の恋の詞や非恋詞に表現が限定されていないことが明らかになった。

#### 4.3 考察

このことから、当時の恋の句において恋の詞や非恋詞とはあくまで指標の一つに過ぎず、当時の俳人は芭蕉と同じように、恋の詞に限定されない恋の句を詠んでいたことがわかる。

また、よく見られた表現としては感情や心境を詠んだ句、婚姻・妊娠などの生活文化や、近世風俗に関する句が多く見られた。蕉風俳諧が日常卑近の句を詠んだことから、旧派俳諧でもこの流れを受け、日常生活で見られる恋の場面を詠んだ句が多かったと思われる。

### 5. まとめ

#### 5.1 旧派における恋の句

明治時代初期の恋の句は江戸時代の詠み方を踏習していることがわかったと言える。

#### 5.2 旧派の類題句集としての「明治新撰俳諧姿見集」

「明治新撰俳諧姿見集」が発行され、重要があったということは、旧派の俳人にとって、恋

の句が重要な題材であったことを示す。

恋の句を詠むうえで指標として恋の詞が俳論書に掲載され、恋の句の手引書として本書のような類題句集が重要であった。

本書は恋の句の中でも特に数の少ない発句について2000句以上収集し、「俳諧恋のたより」を復刻することで、恋の句の手引書としてまとめられている。明治時代初期の貴重な俳書と言えよう。

#### 文献

- [1]尾形仿.俳文学大辞典.角川書店.1995
- [2]清登典子.俳諧詞寄せ類に見る「恋の詞」一覽—寛永期から元禄まで—,俳文藝,1987,vol.22,p27-53.
- [3]秋尾敏.子規の近代.新曜社,1999,302p.
- [4]越後敬子.幕末俳壇と明治俳壇の「断絶」と「連続」—其角堂永機を例にして.国文学:解釈と鑑賞.2009,vol.74,no.3,p92-99.
- [5]村山古郷.俳諧の暗い時代—江戸から明治へ—.文学.1985,vol.53,no.11,p217-221
- [6]櫻井武次郎.俳諧—最後の光彩.江戸文学.1999,vol.21,p21-31.
- [7]高木蒼梧.俳諧人名事典.巖南堂書店,1970
- [8]伊地知鐵男.俳諧大辞典.明治書院,1957
- [9]白石悌三.恋句の諸相—芭蕉の付句 蕪村の発句—.国文学:解釈と教材研究.1996,vol.41, no.21,p99-105.
- [10]楠本六男.特集,近世文学に描かれた性:恋尽くしの連句—『江戸筏』と『にはくなぶり』—.国文学:解釈と鑑賞.2005,vol.70,p66-73.
- [11]宮脇真彦.特集,近世文学に描かれた性:芭蕉晩年の恋句.国文学:解釈と鑑賞.2005,vol.70, no.8, p50-57.